

さんこう昔話文庫

第9話 しょうけん鼻

八面山の頂上を「しょうけん鼻」と呼び、百メートルを超す絶壁がきり立っている。

昔、ここに大鬼がいて、その体は雲表にそびえていた。毎日何もせず、ぶらぶら歩き回っては手当たり次第に人間の生き血を吸うので、人々は安心して暮らせなかった。

それを見かねた薦八幡の神は、何とかしてこの鬼を退治しようと思い、いろいろ思案をめぐらし、ある日、鬼を呼んだ。八幡の神は「三角池を一夜のうちに掘れ、掘ったら何でもお前の望みをかなえてやろう。もし掘れなければどこかへ退散せよ」と言った。鬼は「たやすいこと。必ず掘ってみせる」と約束した。

鬼は神との約束を果たそうと、休む暇もなく、一生懸命掘った。そのかいあって、明け方近く掘り終わりそうになった。

これを見ていた神は「これは困った。なんとかせねば……」とあせり始めた。思案の末、夜の明ける前、鶏の勝どきのまねをして夜明けを告げた。

一生懸命掘っていた鬼は、これを聞き、「ああ、オレの負けか」と言って、池掘りに使っていた大きなしょうけ（竹かご）を空高く投げ上げ、いずこともなく消え去った。しょうけは、ひらひら舞いながら落ちて、八面山の頂上にひっかかった。

このことから「しょうけん（の）端（鼻）」と呼ぶようになった。

鬼がいなくなっても、長い間いじめられてきた人々は、またいつ現れるか分からない、と不安であった。

薦八幡の神は、自分との約束を人々に知らせた。それから人々は安心して暮らすようになったという。

